

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

高齢化社会の地域防災----- 折茂 幸男 良寛の生き方----- 岡本 治之
柳田国男と松岡映丘----- 小川 洋子 カタカナ用語が使えなかった時代を想う 中村 一郎

日本の人口問題の闇

村田 修造

日本の人口を論じる時に衝撃的なことが立て続けに起きている。例えば、

① 2015年に人口が減少に転じる

1億2800万人台を維持していた人口が2015年に減少に転じ、減少傾向はこれからも続くことである。

② 「ミリオンショック」
子供の出生数が100万人を切る

1947年から1948年にかけての団塊の世代の出生数は260万人を超えていたが、丙午の1966年の合計特殊出生率は前年に比べて25%下がり出生数は138万人と極端に少なくなった。ところが2015年には出生数が100万人を切ってしまった。次の丙午は2026年である。何が起ころるのであろう。

③ 「1・57ショック」とは何か

1966年に丙午の合計特殊出生率は1・58であった。1989年には1・57になり、「1・57ショック」と言われた。合計特殊出生率が2・08ないと人口が維持できないと言われている。

④ 「高齢社会」の到来

65歳以上の人口が14%を超える「高齢社会」といわれるが、2015年には26・1%であった。いずれ30%を超える「超高齢化社会」が見えている。2060年には40%に達する。

⑤ 労働力人口の減少

労働力人口は1991年に6500万人台を付け、その後も6000万人後半を維持していたが、2019年の推計では20年後には1000万人減少し、5000万人台になるとされている。

⑥ 「8000万人ショック」
2066年には総人口が8000万人になる。

さように日本の人口には衝撃的な事象が続き、しかも改善の見通しが無い。

政府は「子ども・子育て支援」、「保育園、幼稚園や大学の無償化などの教育」、「入管法の改正による外国人の受け入れ」、「消費税の10%課税」、「年金・医療・介護費の削減」などの政策を打ち出しているが人口減少対策としてはその効果は限定的である。

何よりも求められるのは、人口減少の現実を見つめて、長期の方策を日本人一人一人が考えることだ。そのためには格差の無い社会をつくること、例えば年齢、性別、働き方、資産、学歴、地域などに起因する格差をなくすことが求められる。

(編集委員)

高齢化社会の地域防災

4年前、退職を機に自治会活動に関わるようになった。それまで家庭や地域のことなど振り返ることも無く仕事一筋で生きてきて、まして地域防災など全く無関心に日々を過ごしてきた。昨今、全国で地震や豪雨などの自然災害が多発している。起きるたびに地域防災が重要だと漠然と感じながらも、いざ自分が推進役となると気が引けた。

東日本大震災以降、行政で「地域防災力の強化」が叫ばれている。防災力は、自助、共助、公助で構成され、「共助が地域防災の要」だと説く。この地域の防災に何が必要かと自らに問いながら他の委員と進めていった。地区を隔々まで歩き回って危険箇所を記した「防災マップ」を作成した。住民に防災意識を持ってもらうため月刊「防災ニュース」の発行を開始した。

人間は自然災害の発生を防

ぐことは出来ず、被害を減じることしかできない。減じるための最終的な行動は、安全な場所に逃げることであろう。

私の住んでいる地区は約1400世帯、佐倉市内でもかなり規模の大きい戸建て団地でひとつの自治会になっている。65歳以上の高齢者数は、大凡1000人で、高齢化率約30%という数字である。高齢者の中には、寝たきりの方、車椅子の方等、避難困難な住民がいる。一方、このよ

うな住民を助け支援する人は、昼間通勤や通学等で地区外に居たり、仮に、地区内においても、いざ発災した場合、他人を助ける余裕がない可能性もでてくるだろう。また、助けられる方との信頼関係が要求されることもあるだろう。

災害から逃れることの困難な方々を助ける担い手を如何に確保し繋いでいくか、今、私の住む地域防災で最大の課題となっている。

(山王 折茂 幸男)

良寛の生き方

良寛といえは、くがみ国上の山を下って托鉢の道すがら、子供たちと手毬や若菜摘みなどをする姿をすぐに思い出す。しかし、良寛にも坐りぬく参禅の日々もあつた。だからこそ、時として五合庵の床に脚を伸ばして長々と寝そべる風情が、私たちをほつとさせる。

埋み火に

足さしくべてふ臥せれども

こよひの寒さ腹にとほりぬ

冬の草庵暮らしは、囲炉裏に残ったおき澳に足を近づけても、寒さが腹にしみ通るほど冷えきってしまう。厳寒の夜は身も心も凍えるほどであった。ある日、そんな良寛を、老中を引退し藩政改革に熱中していた、長岡藩主の牧野忠精ただきよが五合庵へ訪ねてきた。孤高の僧として知られていた良寛を、寺を建て住職として長岡に迎えたいというのである。

しかし良寛は忠精の頼みを黙

って聞いたあと、無言のまま一句を差し出した。

焚くほどは

風がもて来る落ち葉かな

煮炊きのための燃料には風が運んで来てくれる落葉があるので、これ以上何も望んではいないと言う。良寛はその存在の根本を問われるところでは妥協しなかった。忠精は説得をあきらめ国上を去った。

若き日、円通寺で厳しい修行に励み、師の国仙から印可いんかの偈げを与えられた良寛は、生涯寺をもたなかった。名主になれる身分を捨て、僧としての出世の道を捨て、無一物の托鉢僧となって生きた。

唐木順三は「良寛にはどこか日本人の原型のようなところ、最後はあそこだと言うようなところがある」と言っている。良寛の生き方は、心のふるさとのような、何かほつとするものを感じるのである。

(新白井田 岡本 治之)

柳田国男と松岡映丘

佐倉学専門講座『利根川図志』赤松宗旦の布川を訪ねてのバスハイクに参加した。

江戸時代末、宗旦は『利根川図志』のために臼井古城図を作成した臼井の大川源五右衛門書成宅を訪ねた。昭和12年岩波文庫から刊行された『利根川図志』は、少年期の一時期を布川で過ごした柳田国男の改訂によるもので、印旛沼、臼井八景などを含む利根川中下流の地誌が広く知られた。

柳田国男記念館の座敷に座り、八十過ぎであろう老婆の「かたりべ」話を聞いた。
「柳田国男は十二歳の時に兵庫県から布川で医業を開業していた長兄宅に身を寄せました。その時、徳満寺の間引き絵馬を見たりしたことが、後の民俗学を志す動機となったんです。図柄は、生まれたばかりの嬰兒を母親が押し殺

し、その姿の影絵が鬼の姿に描かれています。当時、農村の貧困と飢饉や水災害により間引きの悪習があったんですね。：映丘は凧に絵を描いていました」

「映丘、エイキュウ？」どこかで聞いた名前です。

「もしや、日本画家の松岡映丘では？」と尋ねた。

「松岡家は男ばかりの八人兄弟で三人は早世、国男は六男で、柳田家に養子に行ったんで名字が違うんです。松岡映丘は八男です。」との答。

私の知っている映丘は、大正、昭和に活躍した日本画家で、大和絵の伝統を近代に蘇らせた大家です。国男と映丘は兄弟だったのですね。でも八人兄弟なんて、二人でも育児等大変なのに、昔の親は偉かったのですね。

門の外まで見送り、握手した「かたりべ」の手の温もりは今でも忘れられません。

(新臼井田 小川 洋子)

カタカナ用語が使えなかった時代を想う

現在わが国では、言論の自由を認められていてマスコミをはじめ、出版界においてもまた、個人間の会話のなかでも自由に使われています。話しのなかで、新しいカタカナ語を聞くと思わずハツとして、相手に対して勉強してるナ：と思ってしまうこともありま

す。しかし、このカタカナ語も使用が禁止されていた時代があったのです。昭和18年ころから終戦の日まで：と記憶しています。

主なものを例に挙げますと、ノート、ブック、ポケットなどは、「帳面」、「本（図書）」、「物入れ」などと言い換えて使っていました。

野球などは、「ストライク（よし）」、「ボール（だめ）」、「ランナー（走者）」と言った調子でした。なぜ、カタカナ語が禁止されたのか、敵国語（米国・英国）だから正しい

日本語を使いなさい：と指導されたものでした。当時、私は小学校3年生で、子供でしたから不自由は感じませんでした。大人たちは感じていたのではないかと思えます。しかし、両親は日常会話の中で愚痴をこぼすこともありませんでしたので、戦時下でありますから黙々と従っていたのではないかと思えます。

至る所に「鬼畜米英」、「米英撃滅」、「欲しがりません勝つまでは：」、「撃ちてし止まむ」の標語が溢れていて、合言葉のようになっていました。このようなことを思い出す度に、現代は本当にありがたい。平和は本当に素晴らしい：と思うことしきりです。しかし、しかし、「平和ボケ」にならないようにしなければ、と自身を戒めています。

(西志津 中村 一郎)



4月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

先日、東京北区飛鳥山公園にある渋沢栄一史料館を訪ねた。渋沢は、1840年埼玉県深谷市の富農の長男に生まれ、幼少より「四書五経」や「日本外史」に親しんだ。江戸に出て尊王攘夷志士となるが、徳川慶喜の幕臣となり、慶應3年パリ万博の随員の機会を得る。この時の感動と経験がその後の人生を決定付けた。帰国後、一時の役人生活（大蔵省）を送り、退官した後は終生、民間で活躍する。

第一国立銀行設立を手始めに、

東京瓦斯、王子製紙、秩父セメント、帝国ホテル等500社に上る企業の設立に関わったが、他の財閥の如く同族企業体を作ることはなかった。

社会活動の面でも日本赤十字社、聖路加国際病院、日本女子大学等の設立に関わる。

「論語と算盤」で著した道徳経済合一説は有名で、倫理と利益の両立が国を富ませる根源であると説いている。

（北山 仁志）

あとがき

「光陰矢の如し」古くから言われてきた。最近特にこれを実感する。4年間のカレッジ生活も今年が最終学年、あつという間の3年間だった。

どうして年を取ると時間が経つのが早いのか。「チヨちゃん」の答えはこうだった。「年を取ると感動する事が少なくなるから」。しかし、この答に私はどうしても納得できない。カレッジ生活では新しい仲間も増え、様々な行事はある意味新鮮で、感動の連続であった。

それに比べ、現役時代の会社勤めでは、ノルマ、ストレスを伴いながら毎日同じことの繰り返し、なんと1年が長く感じたことか。

元気であちこち出掛けて楽しんで一日より、病に臥せて何もできない一日の方が短く感じるのだろうか。時間の流れの長短は、心地よい時を過ごしているか、そうでないかで変わるような気がする。

私はこれからも精々、あつという間の人生を過ごしていきたいと思う。

（芝崎 茂）